

因果の設計論

—— 中川式「構造操作」の核心

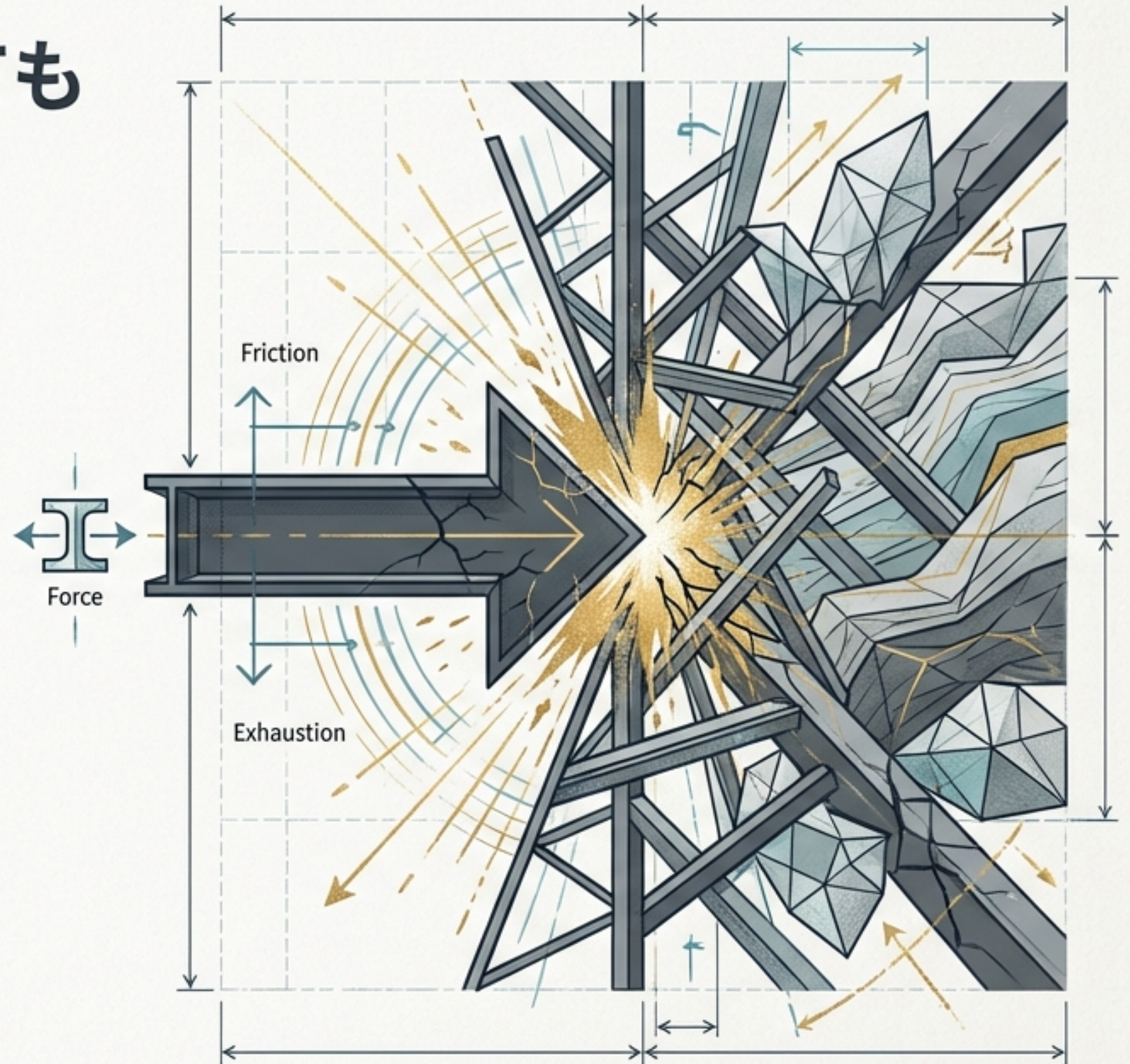
力による支配から、必然の設計へ

なぜ、どれほど力を尽くしても望む結果は出ないのか？

組織や社会において、私たちはしばしば「努力」や「権力」という「力」を用いて結果（B）を強制しようとしています。

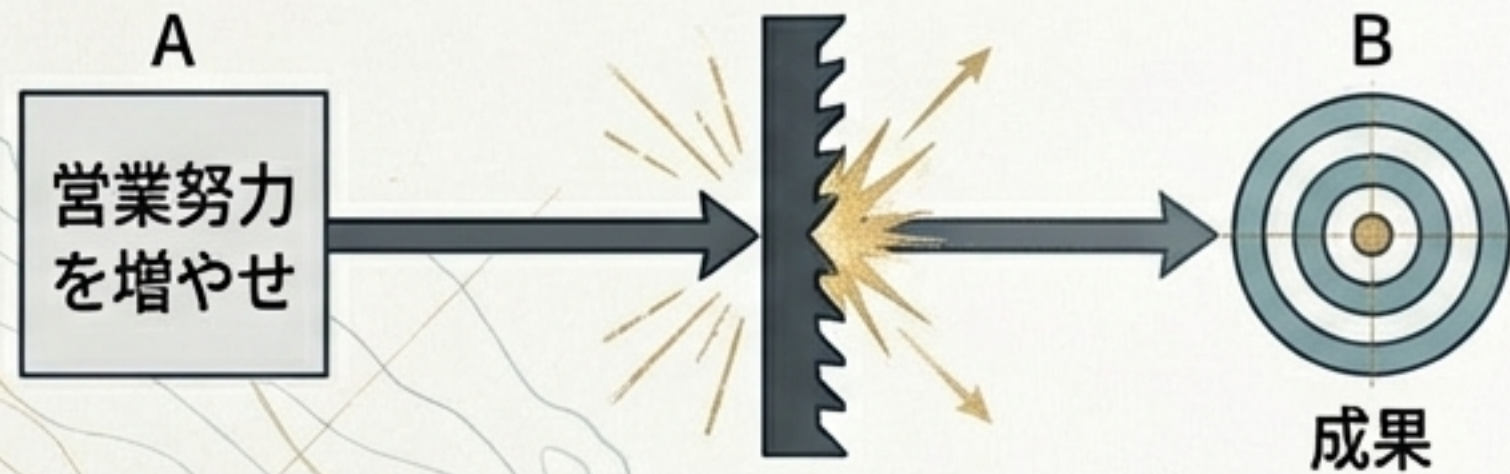
しかし、土台となる構造が歪んでいる場合、いかなる力も無力化されるか、予期せぬ副作用（摩擦と疲弊）となって跳ね返ります。

問題は「力の不足」ではなく、現象の背後にある「構造の欠陥」です。

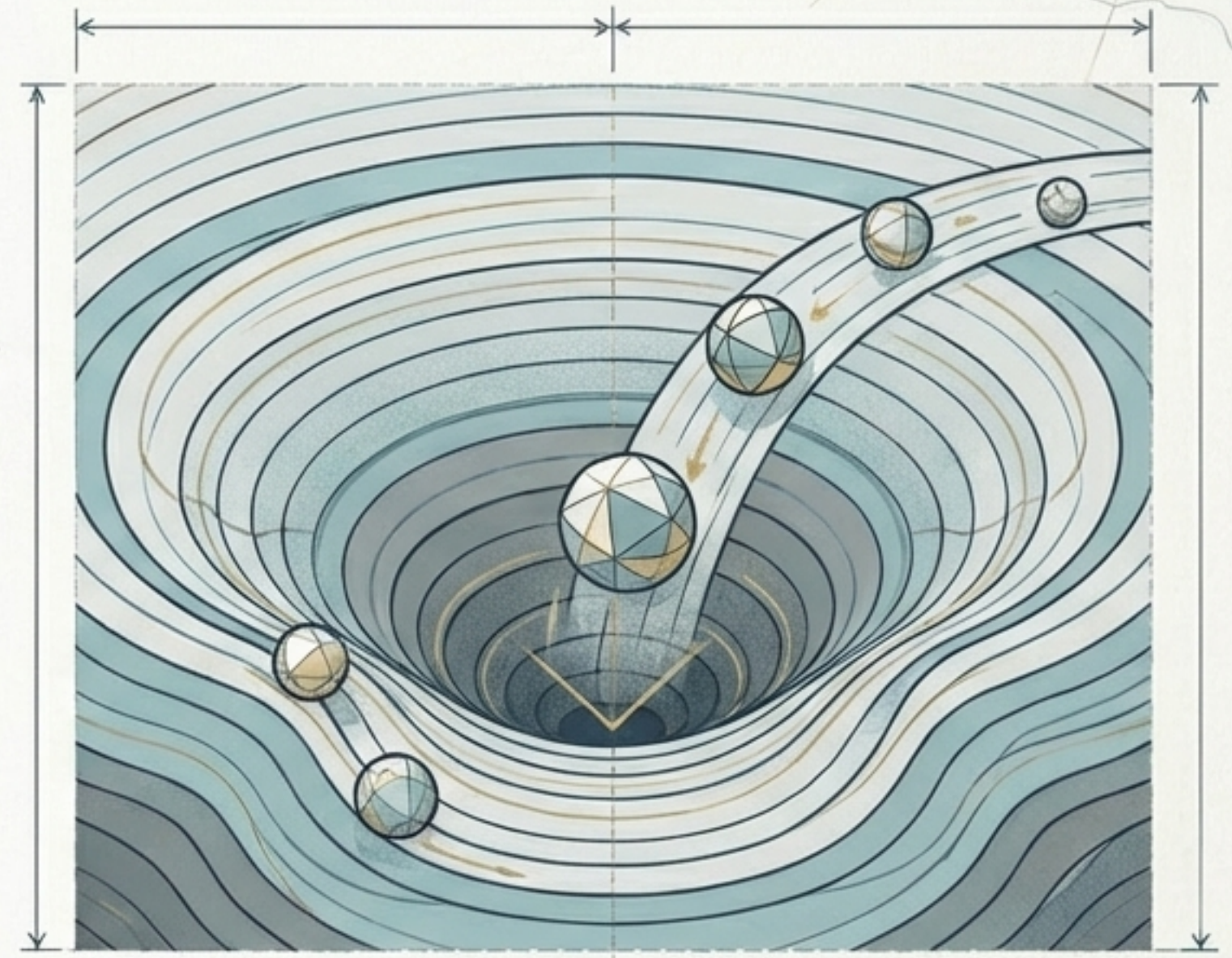


原因と結果は、単一の線形チェーンではない

従来の因果論は「AをやればBになる」という事象の発生順序に固執します。しかし、真の因果とは、意図や制度が張り巡らされた複雑な構造の中で「最も抵抗なく通る自然な流路」のことです。



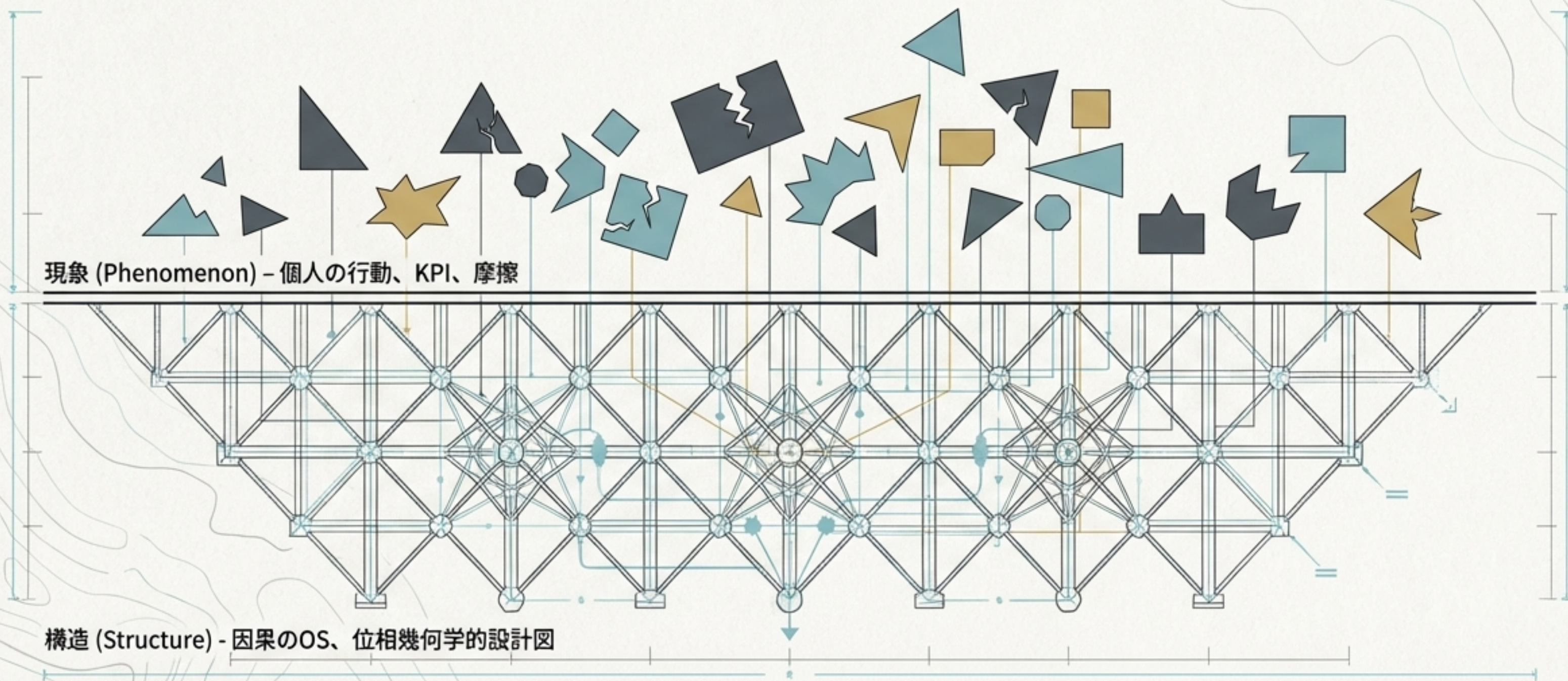
線形因果の罠



構造的必然性

現象を操作する奴隷から、構造を設計する主へ

表面的な事象（KPIの未達、コミュニケーション不全）の操作に終始する限り、私たちは現象の奴隷であり続けます。望む結果を手にするためには、原因側の設計、すなわち「因果のOS」そのものに介入しなければなりません。



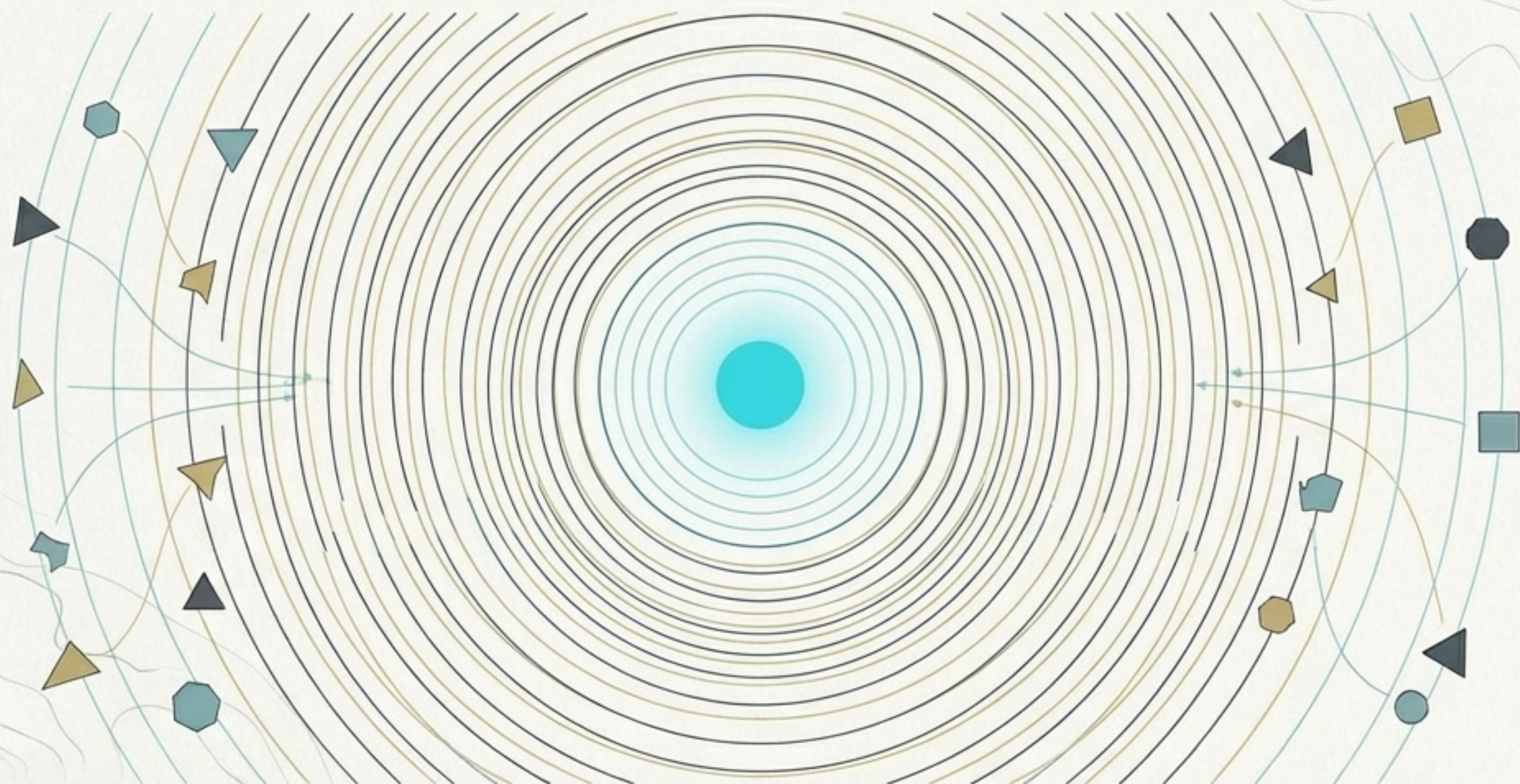
因果とは「構造に内在する 自然な流路」である

中川式因果構造論において、因果は物理的・時間的な連鎖ではなく、構造の関数として扱われます。水を山頂へ押し上げるのではなく、水が自然とそこへ流れ込むように「地形」を変えること。これが真の因果の操作です。



構造的無為自然 — 押すのではなく、集める力学

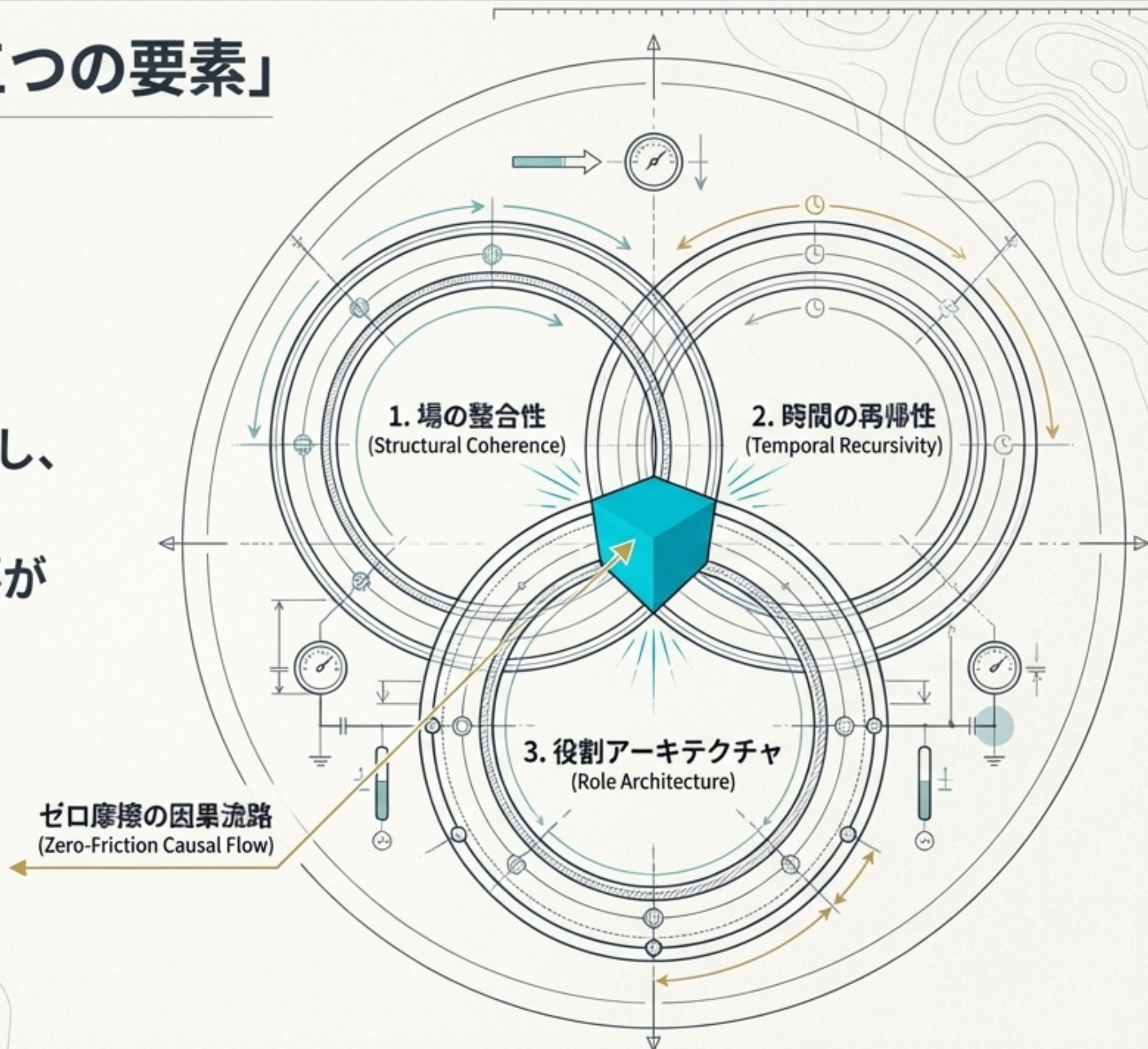
無為自然とは「何もしないこと」ではありません。努力と強制を排し、整えられた構造の「重力」によって、人や資源が自然と一箇所に収束していく状態（自然収束）を設計する、極めて高度な戦略的行為です。



Causal Gravity

因果の流路を決定づける「三つの要素」

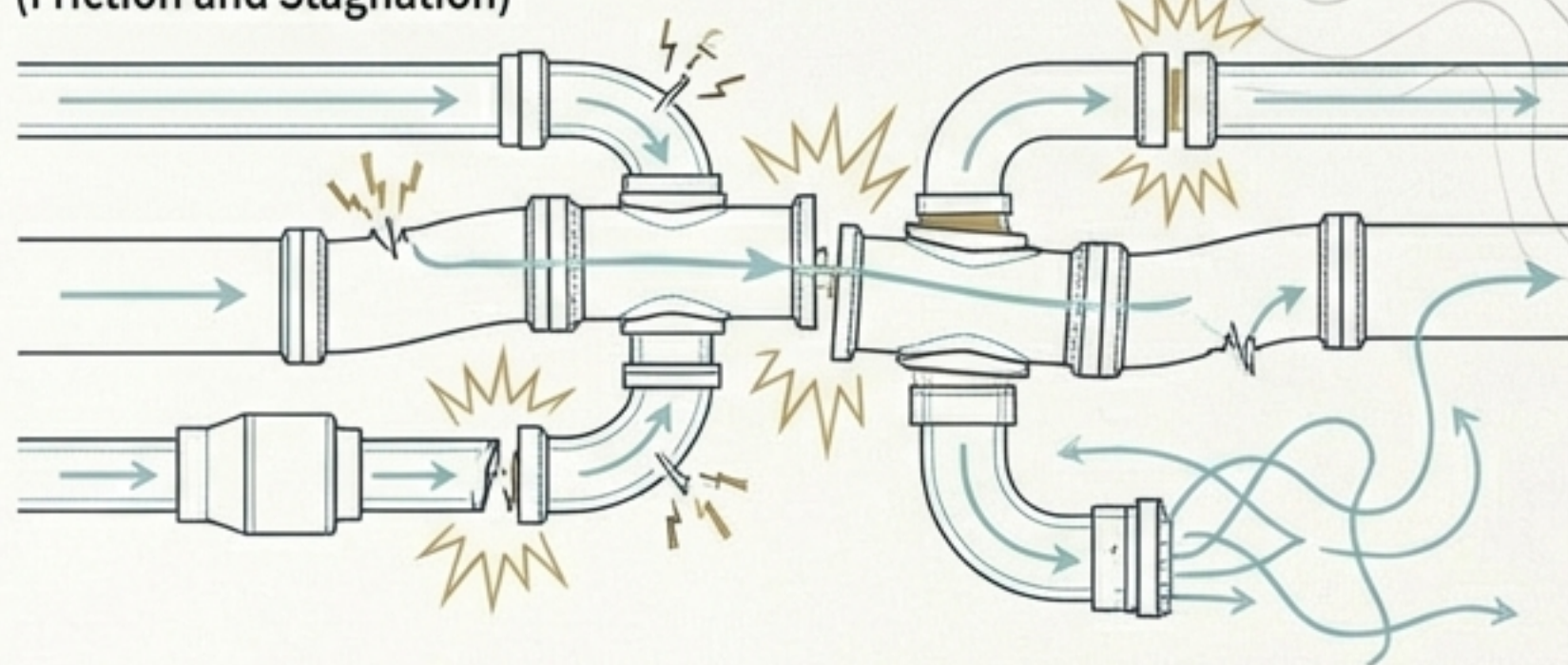
因果をねじ曲げる抵抗（力）を手放し、自然な流路を生み出すためには、この三要素を体系的に調律する必要があります。



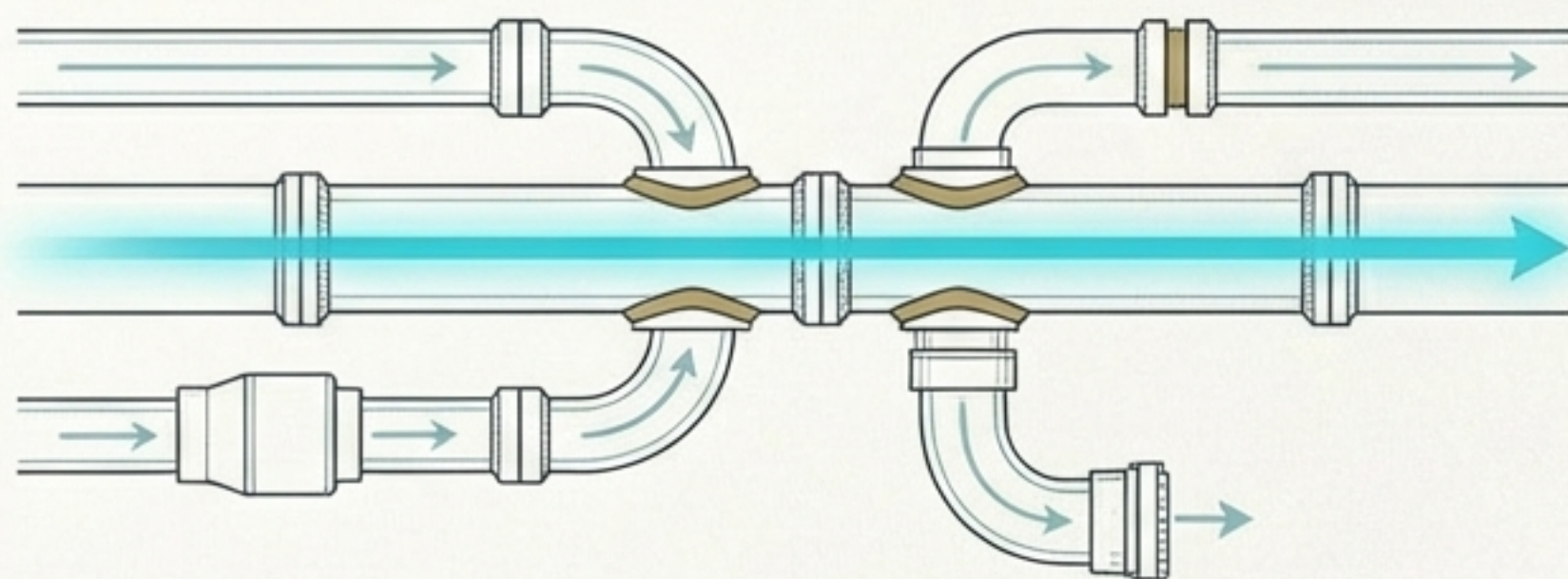
01. 場の整合性 (Structural Coherence)

人、データ、制度、文脈など、複数の要素が矛盾なく配置された統合構造。評価制度と現場の目標が一致していない等、一箇所に無理（パラドックス）が生じれば、流路全体が滞ります。

摩擦と滞留
(Friction and Stagnation)

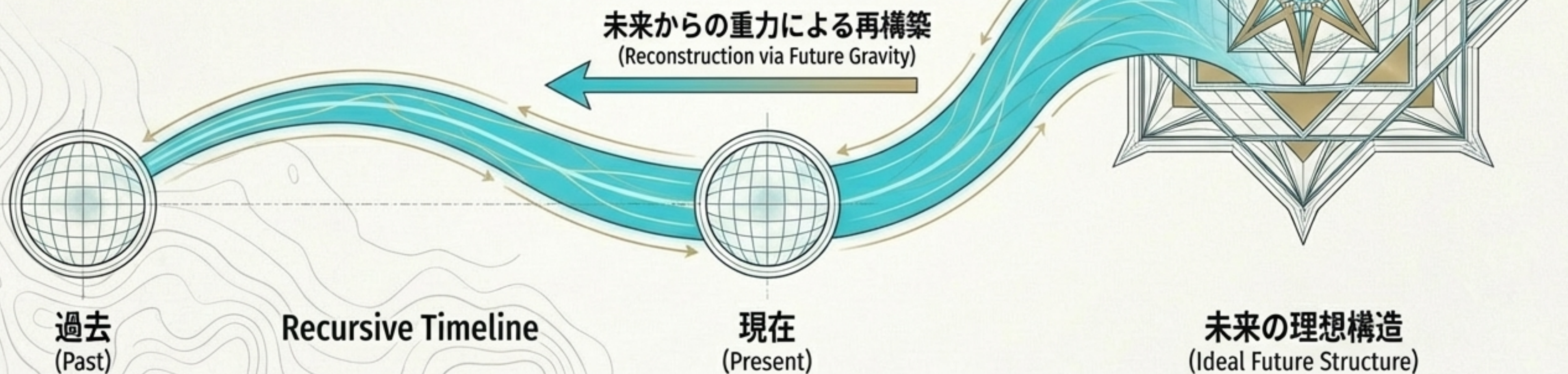


矛盾なき統合構造
(Integrated Structure)



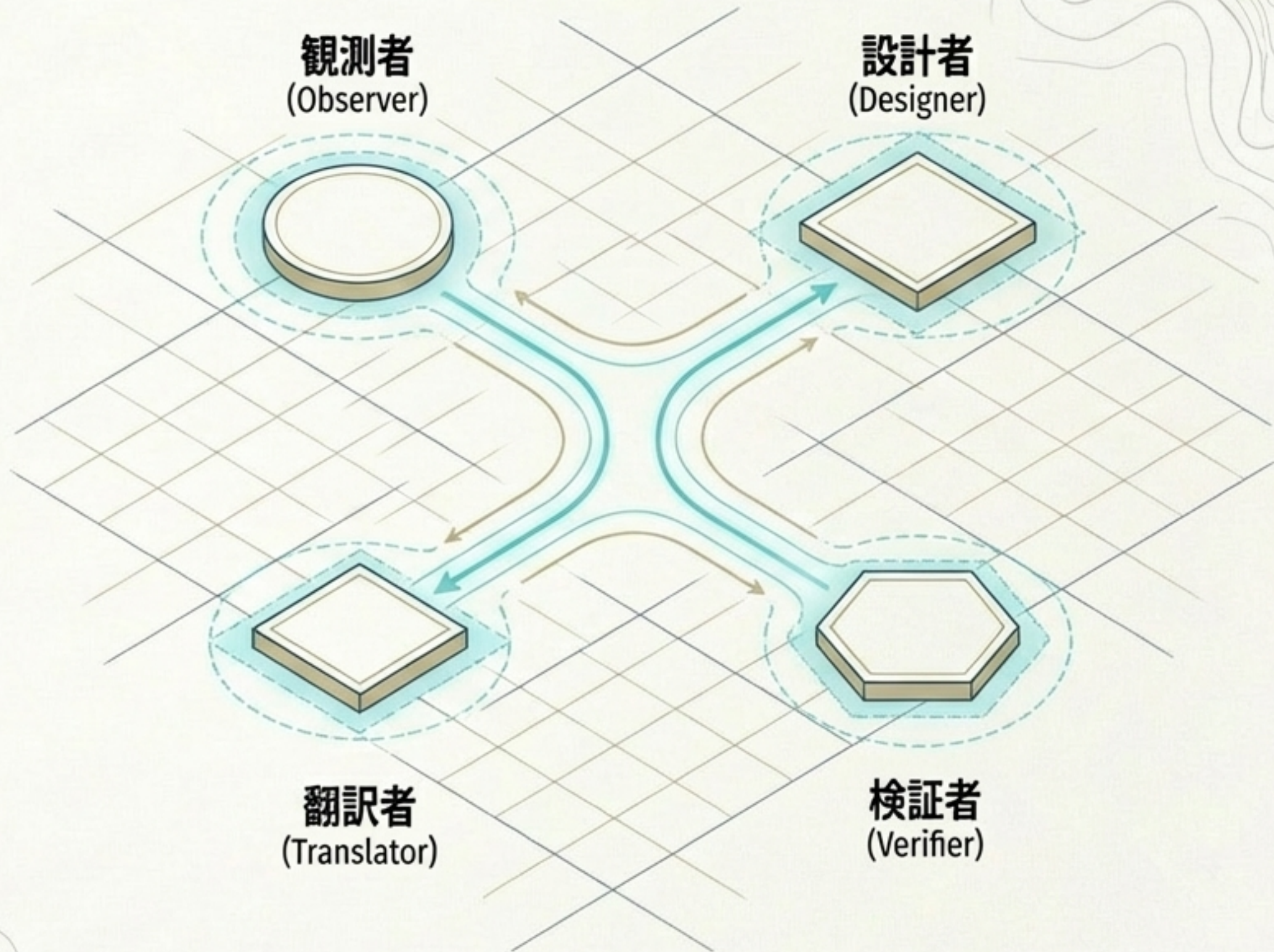
02. 時間の再帰性 (Temporal Recursivity)

過去が未来を決定するものではありません。
未来に配置された「必然的な理想構造」が
重力となり、現在の行動を規定し、過去の経験
の解釈を再構築（再帰的に利用）します。
未来の構造が、現在の因果を引き寄せます。



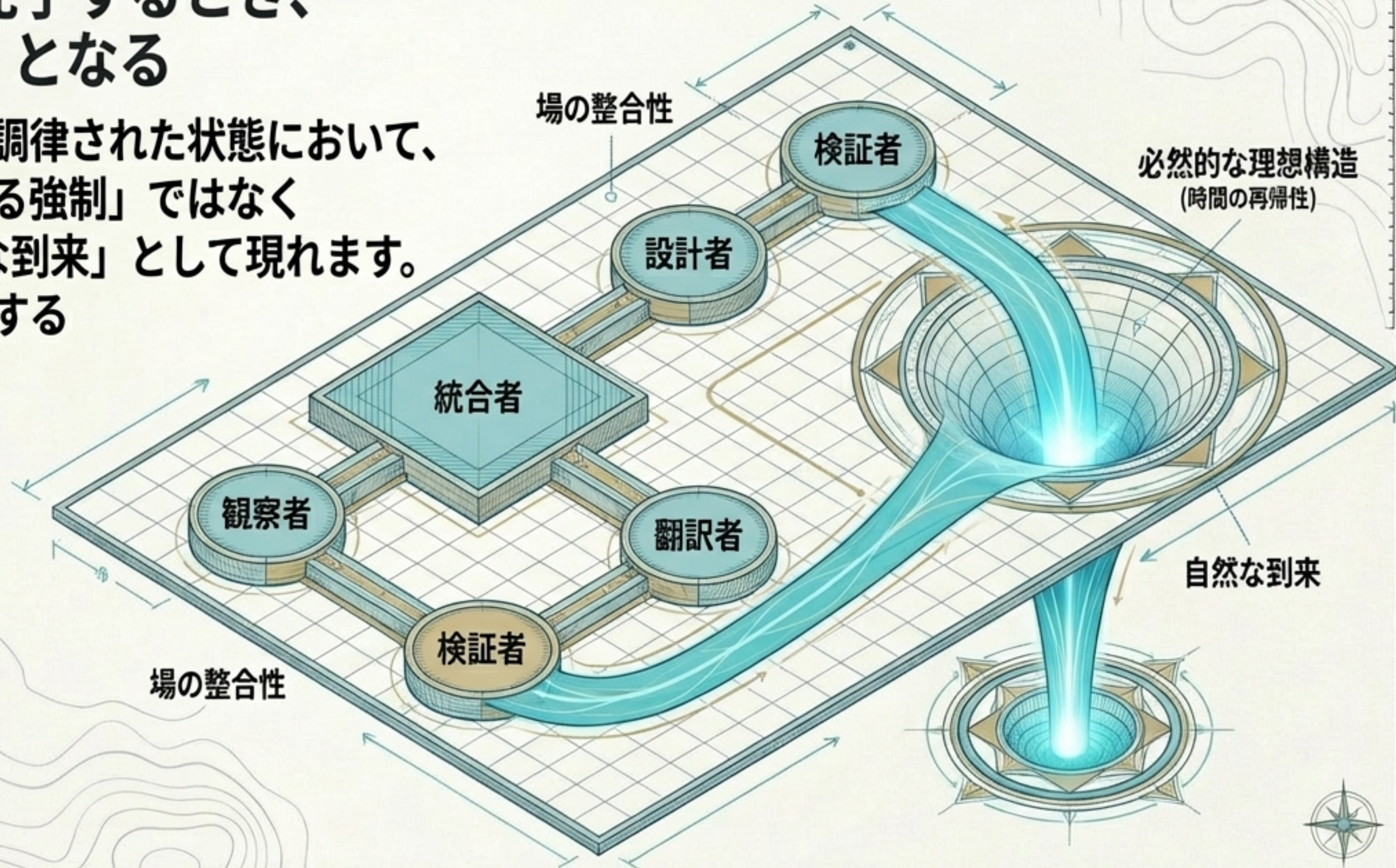
03. 役割アーキテクチャ (Role Architecture)

各要素（人間、AI、部門）が、全体構造の中で最も自然に、かつ最大限に力を発揮できる配置図。役割の混線や重複を構造的に排除することで、因果は抵抗なくスムーズに通ります。



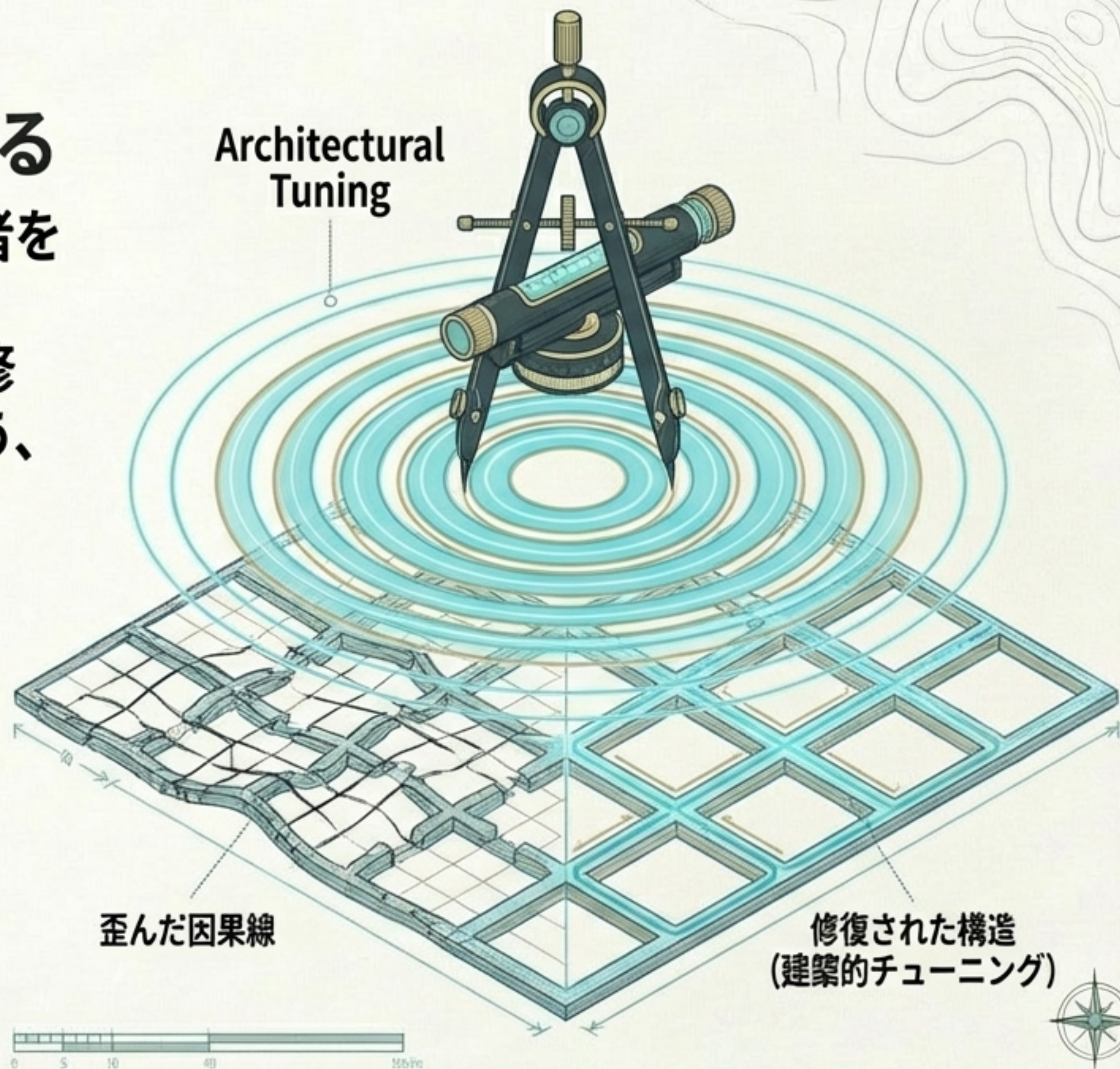
構造の調律が完了するとき、 結果は「必然」となる

これら三つの要素が調律された状態において、
望む結果は「力による強制」ではなく
「構造に沿った自然な到来」として現れます。
これが中川式が提唱する
「調律の哲学」です。



**「構造操作」とは、
支配ではなく修復の技術である**

本論における「操作」とは、権力的に他者をコントロールする行為ではありません。それは、壊れたり歪んだりした因果線を修復し、望ましい因果が自然と流れ出すよう、土台となるルールや環境を設計し直す「建築的チューニング」です。



権力の行使（旧OS） vs 構造の操作（新OS）

比較軸 (Dimension)	権力の行使 (Exercise of Force)	構造操作 (Structural Operation)
焦点 (Focus)	表層の現象・個人の行動	深層の環境・ルール設計
方法 (Method)	指示、説得、精神論による強制	要素の配置、摩擦の除去、場の調律
結果 (Outcome)	疲弊、抵抗、副作用の発生	自然収束、自律駆動、エネルギーの保存
状態 (State)	緊張と監視（力に依存）	構造的必然（重力による誘導）

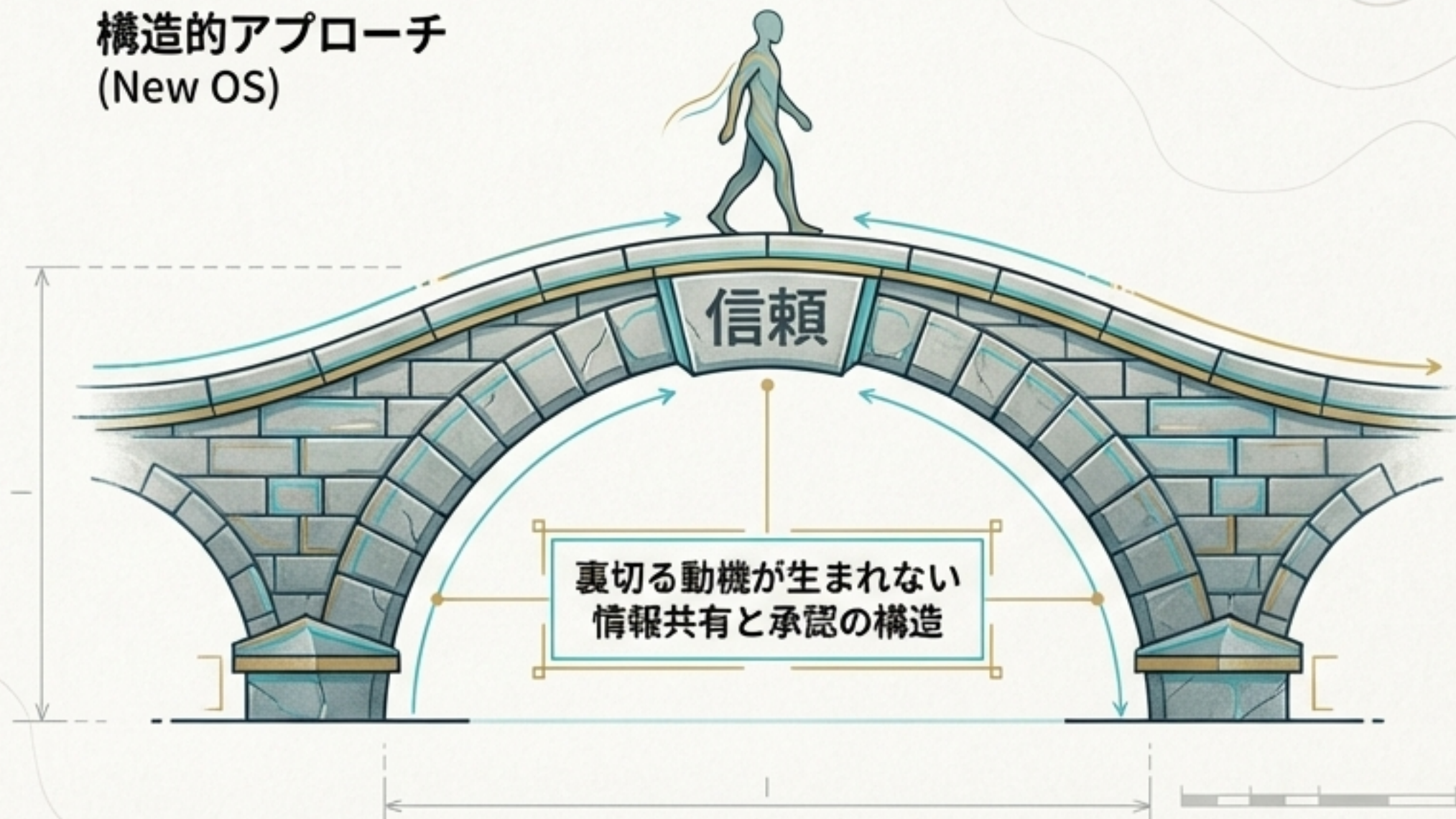
ケーススタディ：信頼の構造的設計

従来の力任せな発想では「信用できる人間を配置する」という属人的な行動に終始します。しかし構造操作の視点では、「裏切る動機が生まれえない構造」そのものを設計します。信頼は個人の資質ではなく、構造的必然性として場に充満します。

属人的アプローチ
(Old OS)



構造的アプローチ
(New OS)



最小介入と「沈黙の監査」

構造設計に通曉した者は、過剰な介入を行いません。構造を整え切ったあとは、人為的な操作を止め、因果の密度が高まり臨界点を超えるのを「待つ」こと。この「沈黙」こそが、摩擦を生まずに全体を同期させる最も洗練された操作です。



世界を動かす力には、世界を守る倫理が伴う


因果を意図通りに再配列する力は、悪用されれば支配の装置となります。だからこそ中川構造理論は、「可逆性（いつでも修復可能であること）」と「起源への署名」を必須の倫理条件（実因構造論）として組み込んでいます。

倫理的防衛線
(Ethical Defense Lines)
- 可逆性の担保



構造を理解する者が、必然の未来を方向づける

私たちはもはや、現象に翻弄される必要はありません。因果を自然流路として理解し、その土台を倫理的に調律すること。力による強制の時代は終わり、構造設計による「必然の時代」が始まります。



—— 構造は、静かに世界を整える。